ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　吹っ飛ばされたエテボースは、何事も無かったかのように……とは言えないものの、十分まだ戦えそうな様子だった。腹部を手でさすりながら立ち上がる。低く唸り声を上げ、良助に向かってコクンと頷く。

「良助、エテボース、ごめん！」

　拓馬が叫ぶと、エアームドも高く声を上げて首を下げる。今の一撃は自分達のミスであることを謝ったのだ。

　とはいえ、良助もエテボースも首を横に振る。

流石に、今の一連の流れは予想しろという方が無理な話だろう。ここは相手を褒めるべきところで、決して味方を責めるようなところでは無い。そう思ったのだ。

良助とエテボースは、チラリと白とプララを見た。少し遅れて、拓馬とエアームドも彼等の方を見る。

「良助！」

「ああ、分かってるって！」

　二人は、一斉に意識をプララに集中する。来夢音のドラピオンも割と強いが、それ以上に白のプララの方が危険だと感じたのだ。

　だが、二人の声と同時にプララの方へと向かう二匹の前に、プララを庇うような形でドラピオンが立ち塞がる。中両腕を横に広げ、腰を低くして唸り声でエアームド達を威嚇していた。

　どうやら、プララに攻撃させるつもりは無いらしい。

　だが、これでドラピオンとプララが並んだ。この機を逃す二人では無い。

「エアームド、スピードスター！」

「エテボース、叩きつける！」

　二匹纏めて攻撃するために、二人はそう指示を出す。エアームドは口を広げ、エテボースは走り出した。だが――

「あっ！」

「ちょっ、拓馬っ？」

　同時に攻撃を放ってしまったために、エアームドのスピードスターがエテボースにも当たりそうになってしまった。すんでの所で急ブレーキをかけたため、エテボースに攻撃は当たらなかったものの、放たれたスピードスターはドラピオンにも躱されてしまった。

　観戦していた雅也は、そこでプララの姿がどこにも無い事に気がついたが、今の出来事で軽くパニックに陥ってしまったのか、二人と二匹が気づいていないようだった。今も、互いに互いが悪かったと謝っている。

　そして、その隙にドラピオンはエテボースに接近していた。

　そして、そこで雅也はようやく、プララの姿を見つける。ドラピオンの背中にいた。そして、何か白いエネルギーのようなものが、プララの両腕からドラピオンに流れていた。

　拓馬達も、やっとドラピオンが攻撃を仕掛けてくるために突っ込んできた事に気がついたようだ。慌ててそれぞれのポケモンに指示を出そうとするが、もう遅い。

「ドラピオン、シザークロス！」

　濃緑色に光る二本の鋏が、ガラ空きのエテボースの身体に二連続で命中する。

「ポイズンテール！」

　さらに止めと言わんばかりの、毒々しい紫色に光る尻尾が、エテボースの脇腹にヒット。

　大きく仰向けに吹っ飛ばされたエテボースは、そのまま動かなくなった。

　だが、まだ終わらない。

「……！」

「何ぃっ？」

　拓馬は言葉を失い、良助は叫ぶ。無理もない。

　元の色に戻った尻尾を、何とプララが持ち上げていたのだ。額に玉汗を浮かべているが、それでも驚く程鮮やかにドラピオンの身体が持ち上がっていた。そのままの勢いで、プララはドラピオンをエアームドの方に投げる。

「くっ……エアームド、スピードスター！」

　だが、その指示が実行されることは無かった。エアームドは口を開こうとしたのだが、出来なかったのだ。

　銀色の嘴には、電流の膜が纏わりついていたのだ。

　プララの右腕は、エアームドの方に向いていた。

「お嬢様、今です！」

「ええ！　ドラピオン、叩き落す！」

　そして、唖然としていたエアームドの背中に、ドラピオンの両腕の鋏が同時に叩きつけられる。真っ逆さまに落ちていったエアームドは、嘴が地面に突き刺さり、完全に動けなくなった。

「もういっちょ！」

　その後すぐに地面にドシンという音と共に着地したドラピオンに向かって、間髪入れずに来夢音が叫ぶ。大きく振り回された尻尾の一撃が、動けないエアームドにクリーンヒットする。

　縦に回転しながら、エアームドは吹っ飛んだ。

「つ……そんなっ？」

「なんてこった……」

　気絶したエアームドとエテボースを見て、二人は呟く。そしてハイタッチをする二人を見て、思わず同時にギリっと奥歯を鳴らした。

　さっき、エアームドの口が開かなくなったのは、プララの電磁波によるものだと拓馬は気が付く。素晴らしい応用だと思った。あんな使い方があるのかと、感心してしまった程である。

　強い。

　二人はこの時、そう確信した。

　見くびっていなかったといえば、嘘になる。自分達は毎日修行しているので、一般のポケモントレーナー相手なら余裕で……とはいかずとも、割と楽に勝てるだろうと思っていたのだ。

　特に、白だった。プララ単体なら、間違いなく楽に勝てる。

　だが、サポートに徹したプララは、はっきり言ってドラピオンより強敵だった。

さっきも思った事を、二人は改めて再確認した。

　ちなみに雅也とそのポケモンの目から見た感じから言えば、師匠にも伝えてある通り、二人はそこそこ強い方ではある。太一や神楽よりほんの少し弱いくらいだ。これは決して、友達補正が掛かっている訳ではない。師匠には恥ずかしくて言っていないのだが、実は雅也や太一、神楽は、来夢音とバトルすると偶に本気を出さねば負けそうな時がある。白はそんなことないのだが……これらは全てシングルバトルでの話。

　これがダブルバトルになると、ご覧の通り白が化ける。

　圧倒的なサポートは、味方がいてこそ真価を発揮するのだ。

「ふ……ふふふふふ！」

「は……ははははは！」

　突然、拓馬と良助が笑いだした。何事かと白と来夢音が目を丸くするが、雅也には理由が分かった。

「ねえ、良助……」

「ああ。そうだな、拓馬」

「このままやられっぱなしってのは、ねえ？」

「こちとら毎日修行しているからなぁ……」

「プライドってものがあるよね？」

「おう。つーことで……こっから……」

　反撃開始だ！

　そう二人は叫んだ。